



〔有〕島田刃物製作所

山形市松町1-1-7、電話0231-68418865。嶋田文夫代表取締役・工芸士。伝統の打刃物を製造販

硬くしなやか山形打刃物 独自の工夫ひねりて技術

売。2006年に山形打刃物工業協同組合有志で「工房鍛冶匠」を、npo法人「f u i g o」を立ち上げる。2003年、山形エクセレントデザイン賞受賞。

故起八さんが、円応寺から分家し工場を構えたのは終戦の年。文夫氏はごく自然に手職の世界に入った

山形打刃物の歴史をひもとくと、今から650年以上も前、最上家の始祖斯波兼頼が、刀鍛冶を連れて入部したことが始まり、と伝えられている。もともとは山形城の西、飯塚口に職人の住む町があった。慶長年間、最上義光が城下整備の際、火防の見地から城の北側(今の文翔館裏から江南にかけて)を流れていた馬見ヶ崎川の対岸にあたる地に移した。私たちが知る鍛冶町である。

元禄10(1697)年の『山形故実録』によれば、「屋敷数38軒、鍛冶93人ただし家主、せがれ、弟子ともに」、また、円応寺付近には新鍛冶町が形成されており「鍛冶24人」と記録されている。

その時代、使用された鉄地金は出雲国(現在の安来市辺り)産の石見鉄が最上川から舟で船町へ、そこから馬車や人力で鍛冶町へ運ばれた。作られた製品はタンスなどにつける装飾的な金具や鎌、包丁。近郷近在で使われていたほか、年間3万人

ほど訪れていたという出羽三山参詣者の土産物として重宝がられた。こうした長い歴史を経て、東北で最大の生産額を誇る山形打刃物の特徴は、鉄をたく鍛冶にある。

「鉄と鋼(はがね)を1枚のものに打ちのぼして形を作る。何度もたたくことによって、いい刃物になっていく」(嶋田氏)。

まさに、鉄は熱いうちに打て、の格言通り。たたくことによって鋼の結晶の粒が微細となり強度を増す。しかし、硬さは脆(もろ)さと背中合わせ。鋼と極(ごく)軟鋼と呼ばれる不純物の少ない軟鉄を張り合わせることで、硬いながらもしなやかな山形打刃物が生まれる。

製造過程は以下のような流れとなる。例えば包丁。鋼と極軟鉄を密着させて熱と圧力を加えて接合する(鍛接)。鍛接した素材を約900℃〜1000℃で熱し、ハンマーでたたいて原型をつくる。山形打刃物独特の工程・冷間鍛造を経て焼きを入れる。歪(ひずみ)を取ったら砥石で荒研ぎ、中研ぎと順に進め、最後は刃の部分で研磨し完成する。

出刃包丁、文化包丁、テーブルナイフ、収穫鎌が収まる店内に、製品とともに、一連の工程を説明する実物が順を追ってショーケースに並ぶ。こんな小さな「鉄の塊」が刃物に生きている。

「山形打刃物の素晴らしさを知ってもらうためには、確かな技術に裏打ちされたもの作りに、斬新なデザインを加味した製品を生み出す努力が大切」と嶋田氏は語る。

「日本刀は玉鋼を灼(や)いて鍛えるものである。鍛えるという技は、人間の手を至高の道具とする手職であるが、打刃物もこの刀を鍛える作業線上の手職である。ハガネは生きもし、死にもする。生かすのは材料+技術のうえに、にもうひとつのプラスがなければならぬ。それは『ころ』のようなものである」

今から35年前、詩人真壁仁は著書『手職〜伝統のわざと美』に探訪記を遺している。

最近、嶋田氏は感じるところがあった。「東日本大震災以来、ものを大切に作る気持ちが高まったような気がする。もともと、包丁は代々受け継がれてきたもので、嫁いで来た時にお姑さんから渡された包丁の研ぎを頼んで来た人も少なくなかった。いいものを作ることによって、ものを大切にすることを育てたい」。

伝統の『ころ』に、斬新な『わざ』。新たな時代に鋭く切り込む。



山形エクセレントデザイン賞を受けたひねりてシリーズのナイフ、包丁、鎌

山形デザインコンペティション実行委員会(県、山形県商工会議所連合会などで構成)は魅力的で競争力の強い商品づくりとデザインメインド向上を目指し「山形エクセレントデザイン事業」を展開、山形県内で企画・開発し、生産されている家庭用品、業務用品、公共用品の3分野の製品を対象に、優れたデザインの製品について、選定・顕彰を行っています。山形商工会議所は「キラリ山形発 元気なモノ作り」シリーズ第2弾として、管内で選ばれた事業所を紹介し、第1回目は山形打刃物製造の(有)島田刃物製作所。

静かな住宅街の奥まった所に工場がある。ここから「ひねりて」の技術を取り入れたナイフが生まれた。「ゴムを削るバイトを作ってほしいと依頼があったのですが、その鋼材は高価なもので、余すのはもったいない。何か作れないか、と考えて出来たのがこれです」と社長嶋田文夫氏(71)は語る。切れ味はもちろん、小気味良く、実におしゃれなデザインだ。

嶋田さんは2代目だ。父で師匠の

まれ変わるのか、と驚く。こうした工程を経て独自の製品が生み出された。「ひねりてシリーズ」

「職人は教えられて一人前になるのではない、じっと仕事ぶりをを見て試行錯誤することと身に着く」

(3)代目となる長男大輔さんの仕事に視線を送る文夫氏

